

東京バッハ合唱団 月報

[第765号] 2026年3月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp Site: http://bachchor-tokyo.jp

BACH-CHOR TOKYO

Monthly Newsletter No.765

March 2026

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo Japan

山本悠尋先生に期待します

大村 恵美子 (主宰者)

去る2月7日(土)、山本悠尋先生のご指導による練習を見学させていただきました。

前に立って指揮する姿を拝見し、また素直な感じの、好感をもてるご指導ぶりに触れることができ、とても嬉しい気持ちです。

去年6月の引退公演以来、たぶん半年になるでしょうか、久しぶりの荻窪教会での練習風景でしたが、団員方の懐かしいお顔がご挨拶に来られて、とても嬉しかったです。

練習後、荻窪駅近くの中華料理のお店で、何人かの団員もまじえ、山本先生と会食をしましたが、始終、明るく楽しそうに皆さんとおしゃべりし、私も大いに楽しませていただきました。

これからの音頭取りに、熱いご期待を寄せさせていただきます。どうぞ、よろしくお願ひします。



■山本悠尋氏と主宰者(中央奥の左右)を囲んで。

団員：左列、山本先生の隣から手前へ、小海さん(T)、加藤さん(B)、白井昭子さん(A)。右列手前から、白井均さん(B)、荒井さん(S)、大村(T)。(2026/2/7、荻窪・香酒縁にて)

山本悠尋氏を 正指揮者にお迎えしました

編集部

バリトン声楽家として幅広くご活躍中の山本悠尋(ゆきひろ)氏が、大村恵美子(2025年5月、6月の前回定期公演をもって指揮・指導者の役割を引退)を継ぐ当合唱団の正指揮者に就任されました。

小林道夫氏(任期1963-1975)、大村恵美子(任期1978-2025)につづく、3代目の正指揮者となります。

第124回定期演奏会・予告

— J. S. バッハ日本語演奏・大村恵美子訳詞 —

●カンタータ第20番《雷の言葉 おおなんじ永遠よ》

●カンタータ第196番《主は覚えたもうわれらを》

●カンタータ第51番(ソプラノ独唱カンタータ)より
第1曲アリア《全地よ 歓呼せよ み神に》

●カンタータ第10番《わが魂 主をあがめ》

— 下記2回公演、同内容 —

◇荻窪公演

[日時] 2026年5月30日(土) 14:00 開演

[会場] 日本キリスト教団 荻窪教会(定員50名)

◇三崎町公演

[日時] 2026年6月6日(土) 14:00 開演

[会場] 日本キリスト教団 三崎町教会(定員150名)

— 演奏者(両会場とも) —

- ・指揮：山本悠尋(やまもと・ゆきひろ)
- ・ソプラノ：藤原優花 ・アルト：中島麻紀子
- ・テノール：野中裕太 ・バス：藤田魁人
- ・管弦楽：A R S (コレギウム・アルモニア・スペリオール・ジャパン)
- ・オルガン：田尻明葉 ・合唱：東京バッハ合唱団

— 入場無料 —

【申し込み】メールでのご予約にかぎり、各会場の定員まで先着順に登録させていただきます。日付と会場をご指定ください。
窓口：office@bachchor-tokyo.jp (合唱団事務局)

昨年の当紙面(2025/11、No.761)でもご紹介しましたが、独唱者としての当団との協演は、2014年の第111回定期演奏会に始まり、南相馬市公演(2015年)を含め、第121回(2022年・創立50周年記念)までの長期に及びます。プロフィールやキャリアの詳細は、上記の月報をご参照ください。

指揮者としての登壇は、当合唱団の次回公演がデビューです。声楽家としてのご活躍に、バッハ合唱音楽の指揮活動が加わります。ご期待ください。

月報2026年3月号 CONTENTS

- ・東京バッハ合唱団との「点と線」(小笹俊一) …p. 2-3
- ・新刊紹介：田中克彦[著]「ことばの道草」 ……p. 3
- ・A R S 公演「バッハ独唱カンタータ」(椿 高明) …p. 3
- ・連載：退屈するのはいそがしい [61] (大野博人) p. 4

東京バッハ合唱団との「点と線」

小笹 俊一（後援会員）

私が物心ついたときから、日常の風景の中には常に「東京バッハ合唱団」の存在がありました。両親が深く関わっていたこともあり、私にとって合唱団は家族の一部のようなものでした。恵美子先生にピアノを教わり、森井先生のお話を伺う機会にも恵まれて育ちました。

さらに鮮明に覚えているのは、1977年、私が小学校低学年の頃、経堂の「カフェハウス・バッハ」にお邪魔した時のことです。その場所で大村健二さんとお会いした私は、あろうことか「このカフェの株を買うことはできませんか？」と尋ねたのです。[店の経営主体を「株式会社ベリばとす」とし、広く出資を募った：編集部]。

当時、新聞を読むのが趣味でスクラップに夢中だった私は、「株式会社」という仕組みを知ったばかりでした。世の中の経済活動に対する子どもの純粋な好奇心が口をついて出たのでしょう。その後、私は長くブルームバーグで経済記者としての道を歩むこととなりますが、私のキャリアの「原点」は、間違いなくあの経堂のカフェでの一言にあったのだと、今にして思います。

* * *

一方で、私の父は少し破天荒なところがあり、時折、躁的なほどの強いエネルギーを発する人でした(私も、その気質を受け継いでいる気がいたしますが)。1980年頃、そのエネルギーが行き過ぎたのか、ある時、バッハ合唱団の主要メンバーを引き抜くような形で「東京スコラ・カントールム」という別の団体を立ち上げてしまうという出来事がありました。この時の顛末については、大村先生のご著書にも大変詳しく書かれています。

しかし、父がバッハ合唱団を飛び出してからも、私と合唱団とのご縁は不思議と続くこととなります。1987年に私が上智大学外国語学部フランス語学科を受験した時の面接教官が、今は亡きメランベルジェ先

生だったのです[かつてのバス団員、ガブリエル・メランベルジェ氏]。バッハ合唱団で「ガブさん」と呼ばれ、親しまれていたフランス人でした。面接後、父がガブさんにその話をすると、「なんで事前に言ってくれなかったんだ」と笑っていたそうです。もし試験に落ちていても、裏口で入れてくれたのでしょうか(笑)。

父が多大なご迷惑をおかけしたにもかかわらず、10年ほど前に、私が大村先生にご連絡を取らせていただいた際、先生は快く経堂での食事にお付き合いくださいました。その席で、先生の底知れぬ教養の深さと懐の広さに改めて感銘を受け、それ以来、私は合唱団の会報を時折読ませていただくようになったのです。

* * *

そして、現在へと繋がる最後の「点と線」です。この会報を拝読する中で、私がすっかりファンになってしまったのが、朝日新聞出身の大野博人さんのコラムでした。はなはだ不遜ではありますが、大野さんは私にとって報道記者の大先輩にあたります。長年、海外報道の最前線を走ってこられた大先輩が、安曇野に隠居され、どのようなセカンドライフを過ごされているのか。アラ還の私は「自分事」としての関心を持ってコラムを追っていました。

大野さんの筆致は実に魅力的です。スポーツジムでの出来事や、炊飯器にまつわる日常の何気ない風景を切り取っているにもかかわらず、そこには常に報道記者特有の鋭い視点と、事象の背景を読み解くセンスが光っています。「さすがはジャーナリストだ」と唸られると同時に、その豊かな情緒と思索の深さに、毎回楽しく拝見しております。

話は少し変わりますが、私はブルームバーグの前に勤めたNHKディレクター時代に『男はつらいよ』の渥美清さんのラジオ追悼特番を作った経験があり、寅さんに関する書籍にはつい手が伸びてしまいます。先日も図書館で借りた『山田洋次が見てきた日本』というフランス人ジャーナリストの800ページにわたる大作を読んでおりました。山田洋次監督のこだわる音、映像から世界観までが深く語られ、その空気がフランス人にも伝わることに感慨を持ちながら、その本を読み終え、ふと奥付を見て息を呑みました。なんと、その本の翻訳を手がけられていたのが、大野さんご夫妻だったのです。

* * *

再び点と点が線になり、見事な円を描いたような衝撃でした。驚きと感動のあまり、すぐに大野さんのFacebookへメッセージをお送りしたのですが、残念ながらご不在の箱に入ってしまったようで、まだお読みいただけていないようです。そこで今回、このバッハ合唱団の会報という、私たちを繋ぐ大切な「線」の舞台をお借りして、私の思いをしたためさせていただくことにいたしました。

大野さん、ご著書、大変感銘を受けました。先日、



■春（撮影：千葉光雄、団員 2025/3/26）

連載 60 回に触れて、「うんざりだと感じたら、声を上げて……」と書いていらっしやいましたが、とんでもない、どうぞ、これからもずっと続けていただきたいと切に願っております。毎号、大野さんの紡ぐ言葉と情緒に触れることを心待ちにしている若輩が、ここにあります。

素晴らしいご縁を結んでくれたバッハ合唱団と、この会報に心からの感謝を込めて。

(筆者：元ブルームバーグ紙記者)

演奏愛好家集団「ARS」公演

J. S. バッハ音楽付き管弦楽のコンサート

イタリア語と日本語による
バッハ独唱カンタータ 3 曲の演奏

首都圏だけでも数万人がひしめく演奏愛好家にあっても、音楽の父 J. S. バッハの主たる創作分野として、数百曲の「歌付き管弦楽」の名作が輝いていることは、余りにも知られていません。

今回ARSでは、アマチュア楽団でも取り組みやすい大バッハのレパートリー提案として、ソロカンタータの上演を企画しました。

バッハには珍しいイタリア語作品の原語による上演と、われわれの母語（日本語：もちろん大村恵美子訳）による上演を交えながら、バッハの演奏・鑑賞の新しい地平を展望できればと期待しています。

演目は BWV209, 199, 51。独唱は藤原優花先生、本年 4 月 12 日午後 2 時より、鎌倉芸術館小ホール。

(ARS 代表・椿 高明)

.....

[イタリア語演奏]

- カンタータ第 209 番《Non sa che sia dolore》
(悲しみのいかなるかを知らず) BWV 209

[以下 2 曲、日本語訳詞演奏]

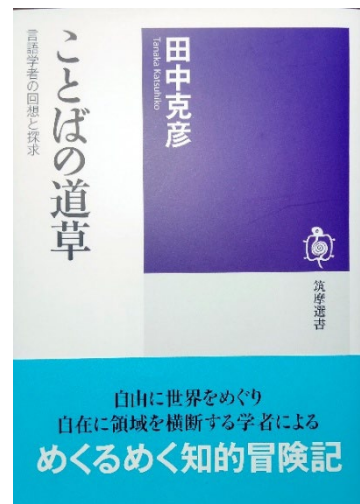
- カンタータ第 199 番《わが心 乱れさわぐ》
(Mein Herze schwimmt im Blut) BWV 199
- カンタータ第 51 番《全地よ 歓呼せよ 神に》
(Jauchzet Gott in allen Landen) BWV 51
(上記 2 曲のボーカルスコア：東京バッハ合唱団出版局)

- ・ソプラノ独唱：藤原優花（本紙 p. 1 予告囲み参照）
- ・管弦楽：ARS（コレギウム アルモニア スペリオーレ ジャパン）

- ・日時：2026 年 4 月 12 日（日）、午後 2 時開演
- ・会場：鎌倉芸術館小ホール
(東海道本線「大船駅」東口・笠間口徒歩 10 分)
- ・入場自由
- ・お問合せ：ARS 広報担当（下記アドレス）

midorigaoka.memorial.assoc@gmail.com

新刊のご紹介



田中克彦 [著]

「ことばの道草 言語学者の回想と探求」

(筑摩選書、2025 年 12 月刊、1800 円)

大村 健二 (団員)

「モンゴルの馬たちは道草を食うだろうか」と、くまえがき>が始まります。読者は、それぞれの記憶のストックから、モンゴルの草原の広々とした光景を思い浮かべられるでしょう。私の場合は、かつて著者ご自身からいただいた、青い空と緑の草原に一面を覆い尽くされた絵葉書の写真を思い出していました。

くまえがき>は続きます。「あの果てしない大草原で草食の馬たちには路などない。路がなければ道草などないはずだ」と。

著者の田中克彦氏（団友）は、当月報にもたびたびご登場いただいています。みなさまよくご存じのとおり、わが国を代表する社会言語学者です。次から次へと著書をお出しになりながら、海外の会議にも足しげく参加をつづけていらっしやいますが、われわれとの交わりのクライマックスは、南相馬市での定期演奏会（3. 11 被災地訪問、2015 年 8 月 22 日）でしょう。

出発前の数か月を、団員として練習場に通いつづけて、当日はコーラスの一員としてステージにもお立ちになりました。曲目には、難関曲の《モテット第 3 番》（日本語版）も含まれます。何度か触れたとおりです。

内容に戻ります。今回のご著書そのものが、これまでのすべての著作の、いわば、くまえがき>あるいはくあとがき>に当たるようにも思えます。

全 7 章は下記の通り。「I 幼き日々の残照」はもちろん道草そのもの。「II モンゴル研究からシベリアへ」、「III ドイツからフィンランドへ」で、知的道草の開始。文字通り「IV 道草の数かず」があり、「V クレオール語研究の初しごと」、「VI 抵抗する言語」、「VII ノモンハンのたたかい」で、抵抗する言語学者の壮大なくまえがき>とくあとがき>が展開されます。

路が見えなければ掘り返す、無ければ造る、モンゴルの馬たちは、旺盛に道草を食うのでした。

とにかく痛快です。ぜひご一読を。

<連載随想>

退屈するのはいそがしい [61]

「宇宙人」来襲

安曇野閑人 大野 博人



上映中の映画作品に何人かの観客たちが立ち上がって拍手をした。映画館でそんな光景を見るのは初めてだった。

1996年、取材で訪れた米国中西部の都市、セントルイスでのことだ。現地で知り合った米国人記者から「ずいぶんやっている映画があるんだけど、観に行かないか」と誘われて出かけた。

「インディペンデンス・デイ」というハリウッドの娯楽作品。宇宙人が地球に攻めてくるというSFでは陳腐な設定のストーリー。

宇宙人は科学技術で人類よりずっと進んでいて、質量ともに圧倒的な軍事力を持つ。それに対し、人類が決死の反撃を開始する直前、米国の大統領が全世界に向けて演説する。これは全人類の危機だ、些細なちがひなど乗り越え、一丸となってわれわれの独立と自由を守ろう……云々。おりしもそれが7月4日、米国の独立記念日。「だが、今日は人類の独立の日だ」とのたまう。

拍手がわいたのはこの場面だ。ええっ？ 本気で感動しちゃったの？ 私は観客たちの反応におどろいた。

映画では、中国軍もイラン軍もロシア軍も、「ささいな違いなど乗り越えて」、米国とともに立ち上がるという展開になる。いやはや……。

それから30年。今の米国の大統領は、人類共通の脅威、コロナ禍が始まるやいなや病原体を「中国ウイルス」と呼んだ人物である。もし今、宇宙人が地球に攻めてきたら、多分、その宇宙人も中国やロシアの手先だと呼ぶのだろうか。ひょっとすると、あの宇宙人の国籍は中国だ、と言い出しかねない。

■映画「インディペンデンス・デイ」で米国大統領が演説する場面。30年前の映画館ではこの場で拍手がわき、私はシラけた。ネット配信で見直してもやっぱりシラけた。

(写真提供と説明：筆者)



いや、むしろ彼こそが地球の征服をもくろむ遠い星から送り込まれた「宇宙人」かも。

移民を犯罪者呼ばわりしたり、好き勝手に他国を攻撃したり、領土をよこせと言ったり、国際法は不要だと言ったり。なんだか人類を滅亡に導こうとするかのようで、言動はおそろしく危なっかしい。

ところが、である。

その「宇宙人」に多くの米国人は喝采をおくり、大統領にまつりあげた。さらに、多くの国の政治指導者たちは一丸となって反撃するどころか、すり寄る気配さえ見せる。

人類の「インディペンデンス・デイ」はどうした？

17世紀フランスの思想家、パスカルの「パンセ」に、「正しさ」と「強さ」について考察した文章がある。

「力のない正義は無力である。正義のない力は横暴である」。だから「正義と力をいっしょにしなければならぬ。そして、そのためには、正しい者を強くするか、強い者を正しくするか、のどちらかしかない」。ところが、だれが正しいかというのは、論争の種になりやすいのに対して、だれが強いかはすぐにわかる。で、人は正しい者を強くすることができないので、結局「強い者を正しいということにしてしまった」。

400年も前の思想家の身も蓋もない言葉が、そっくりそのまま、今の世界の現実にも重なる。

最近、知り合いの作家が書いたSF短編を読んだ。「インディペンデンス・デイ」と設定は似ている。はるか彼方の星に住む宇宙人たちが地球総攻撃の準備を進めていることがわかった。あわてて、地球の指導者や科学者たちは対策をこねくり出そうとする。だが、なかなかいい案が浮かばない。

そのうち、宇宙人が総攻撃計画を中止したらしいことがわかる。

どうして？

宇宙人は、人類はほっておいても、自然破壊や核戦争で遅かれ早かれ自滅すると分析。わざわざ攻撃するのは無駄と判断したのだ。正義なき力の横行のなれの果て。

映画より、ずっとリアルな話に思えた。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)

<東京バッハ合唱団、団員募集>

—— 日本語で歌ってます。あなたも一緒に！ ——

- 練習日/会場：毎週土曜日、15:30 - 17:30、荻窪教会 (JR/地下鉄「荻窪」駅・南口から徒歩8分)。
- 団費：5000円 (月額)。見学歓迎。ご一報の上、お気軽にお越しください。詳細はHP参照 (月報タイトル内)
- 練習曲目：次回 (#124) 公演曲…BWV 20, 196, 51-1, 10

2027年 (次々回、#125) 公演予定曲

- ①BWV 3 《しげき悩み いま》、②BWV 5 《いづくに われ逃れゆかん》、③BWV 39 《与えよパンを 飢えたる者に》、④BWV 104 《まきびと主よ 聴けよ》

※次回公演 (5/30、6/6) 終了次第、練習開始です。